シンポジウム「紙のレンズから見た古典籍

―高精細デジタルマイクロスコープの世界― 開催にあたって

「源氏物語研究の学際的・国際的拠点形成」
文部科学省 平成30年度 私立大学研究ブランディング事業
プロジェクト・リーダ　佐藤　悟

ご　挨　拶

実践女子大学は文部科学省私立大学研究ブランディング事業に採択された「源氏物語研究の学際的・国際的拠点形成」の一環として、源氏物語写本の高精細デジタルマイクロスコープ VHX7000 による観察を続けています。そこに見えたものは従来の経験を遙かに超えた紙の物質としての性格で、従来のコディコロジーとは異なる、かねてより石塚晴通先生により提唱されている「文理融合の新コディコロジー」ともいうべき世界が広がっていました。

我々は源氏物語の研究に止まらず、最終的には紙の物差しともいうべき、和紙の編年ができたらと考えています。新コディコロジーの理念と技術から、本の流通や製作に関わる知見が得られるだけではなく、紙が支えた文化や社会の様相が見えてきます。

この度下記の要領でシンポジウムを開催します。共催、協力には新コディコロシーに関心のある研究機関が参加します。ゲストとして石塚晴通先生をお迎えします。一日目と二日目の午前には紙の歴史に関わる発表と講演を行います。二日目の午後には「打紙と米粉」と題するパネルを設置します。

パネルの概要は次のようなものです。源氏物語写本には打紙を施した写本と、そうではない研究ノートのような写本とが存在することが見えてきました。両者の違いを考えることは源氏物語の受容を理解する上で意義があることと考えます。打紙とは何かという根本的な問題にも迫りたいと思います。また近世期の刊本の料紙には大量の米粉が漉き込まれたものがあることも判明しました。米粉の使用は大量製作される刊本には打紙では対応できなくなったため、米粉を充填剤、平滑剤として使用したことが予想されます。理系の研究者と文系の研究者が様々な視点からこの問題を議論します。

文理融合のこのシンポジウムの試みは国文学や美術史の新しい地平を切り開くものと確信しています。